

人間には五感があり、音楽も我々の感覚を刺激します。心を高ぶらせたり、沈めたり、宗教も音楽を取り入れてあります。讚美歌しかり、仏教賛歌しかり、御詠歌なども法要の時に使われます。我が国の宗教でも多くの法要で取り入れられています。心を鎮める為や法要を盛り上げる為に用いられています。

しかしながら、心の鏡に歪ひずみが生じていたとしたら美しい音色ねいろも美しい旋律せんりつも心に響くことはいけません。鏡よ鏡よ鏡さん世界中で一番美しいのは誰あれ」と言う御話がありました。皆様も、もし鏡が曇ったり、歪ゆがんだりして、そのままの姿を映してくれなくなったら、いかなるものでしょう。礼節を保つ為には外見も大切です。そのままの自分が写つてこそ直しようも分かります。しかれども、もっと大事なものは心の鏡です。鏡は女性だけの物ではなく、人間として必要な物といえます。それは人間としての自分を見つめ常に良き判断ができるようにしておく為にです。又、心の鏡に曇りが生じますと「うつ」の病を引き起こしやすくなるのです。心の病は治りにくいのです。それは心の鏡を綺麗にする方法が解らないからです。一口に原因を日常生活の「ストレス」とかたづけるのは早計です。ストレスを持たない方は皆無に近いかと思われませんか。生き年生きて我々は皆亡くなると、閻魔えんまの庁ちやうに往きます。そこで、そこにある三十三枚の鏡に生前の行いが映し出されます。何をしてきたのか一目瞭然りやうぜんです。故に「鏡がある限り」閻魔大王様に嘘は通用しないのです。

人生の鏡の始まりは子供にとってはまぎれも無く両親です。それはやがて自分が親になるからです。行く道じゃ、来た道じゃ」の例え通りです。子供の出來、不出來は両親の出來、不出來の影響が大きいのも当然です。子供にとって親は先生です。親の内面まで知ってしまいます。両親の離婚問題、最悪です。親は我が子に全ての姿をさらけ出し、親を見本として成長を促し、立派に成育させる責任があります。予は銚かすがい、子は宝」とは今では死語になりつつあります。人間としての生活は順送りです。嫁も何時いつしか姑しやうむとなりますし、逆にいえば姑も嫁の時があったと言う事です。お店に行くと、よく試食がございます。試食が不味まずければ、誰もその製品を買いません。見本の品が悪ければその品は売れないと言う事です。見本はとても大事なのです。